

# 食糧報告

担当：香川

## 1. 総括

まず、当初計画していた食糧が大幅に変更された点について述べなければならない。計画は①1日の必要カロリーが摂れること②栄養のバランスが良いこと③簡単に作れることを念頭において細かく考案したが、結局現地では中国隊が全ての食糧を用意し、調理も全て中国隊主導のもとで行われた。日本からはカレールーやシチューの素、ふりかけ、梅干し、それに非常食としてサラミソーセージを持ちこんだくらいで他は全て現地のものを食した。4度に渡って補給を行ったために、結果的には比較的新鮮なものを腹一杯食することが出来、また、野菜中心の食事であったから健康的に日々を送ることができた。食糧係として食事作りのイニシアチブをとれなかった事が少々悔やまれるのだが、これは、中国隊の強い自分たちの味へのこだわりから、我々日本隊主導で作らせてくれなかったのである。ここに、中華思想を見た気がして今ではこれも面白い体験であったと振り返っている。

以下、印象深い食事メニューを思い出しながら、食糧の面から砂漠での1日を追おうと思う。

## 2. 砂漠での食

朝、起きると吐く息は白い。砂漠は昼夜の温度差が激しいことで有名だが、それにしても昼間の暑さからは考えられない寒さである。砂漠に入ったばかりの9月末頃はそれほどでもないが、2～3度遭った嵐（寒流）の後には気温が急激に下がり、朝起きるのが億劫になる。つついもうちょっと、もうちょっととシュラフに頭を埋める我々日本隊をよそに、ウイグル人の朝は早い。敬虔なイスラム教徒である彼らは早朝の礼拝を欠かさない。ようやく我々がテントから出る頃には既に、漢族の方たちも起きており、焚き火の周りで悠々と茶をすすりながら朝食の準備に取りかかろうとしている。出発前のパッキングに1時間くらいかかるために朝食は極めて簡単に作れるインスタントラーメンや、前の晩の残り物が多用される。調理時間があまりにも短いために、眠気眼を擦り擦り、ボーッとしている間に出来上がってしまうことが多く、我々の出番は殆ど無い。

日が昇るにつれ気温も上昇し、昼間は35度以上になる日も多く、まさに灼熱の世界である。あまりにも乾燥しているために不快感はさほどないが喉の渇きがヒドイ。慣れないうちは500ミリのミネラルウォーター2本を一気に飲み干してしまう。隊員の口数も減り、場は沈黙していく。そんな時にいいタイミングで昼食時間がやってくる。昼食といってもそれは、水分を摂ることが一番の目的で、皆の目は駱駝の背に積み重ねられているスイカに集中する。そして、その存在を確認した瞬間、その場の一種緊張したともいえる雰囲気が一気に和んでいく。隊員の目に輝きが戻り、白い歯がこぼれ、その手は容赦なく真っ赤な果肉へと伸びていく。ここは、まさしく果てしなき砂漠の中にポツリと一時的にできた小オアシスである。そして今考えてみれば、この一番暑く、苦しい時間帯こそ最も隊員たちと一体感を感じ、「ここが夢にまで見た砂漠なんだ。」という幸せを感じる一時であったように思える。

腹一杯食ったスイカで腹をタプタプ鳴らしながら再び灼熱の世界へ戻り、歩くこと約4時間。時計の針は19:00を指している。1日の中で最も美しい時間の到来だ。行程を終えて西に沈みゆくデッカイ夕日の下で悠々と草をはむ駱駝の姿はなんとも壮麗である。そんな姿に見惚れながら、薪を集め、夕食の準備に取りかかる。昼間はあまりの暑さに水分ばかり欲していたが、気温の下降とともに一気に食欲のボルテージが上がる。野菜炒めに白いご飯、ラーメン……等何でも美味しいが特に美味かったものがある。ここでちょっと紹介してみよう。まずはイスラ



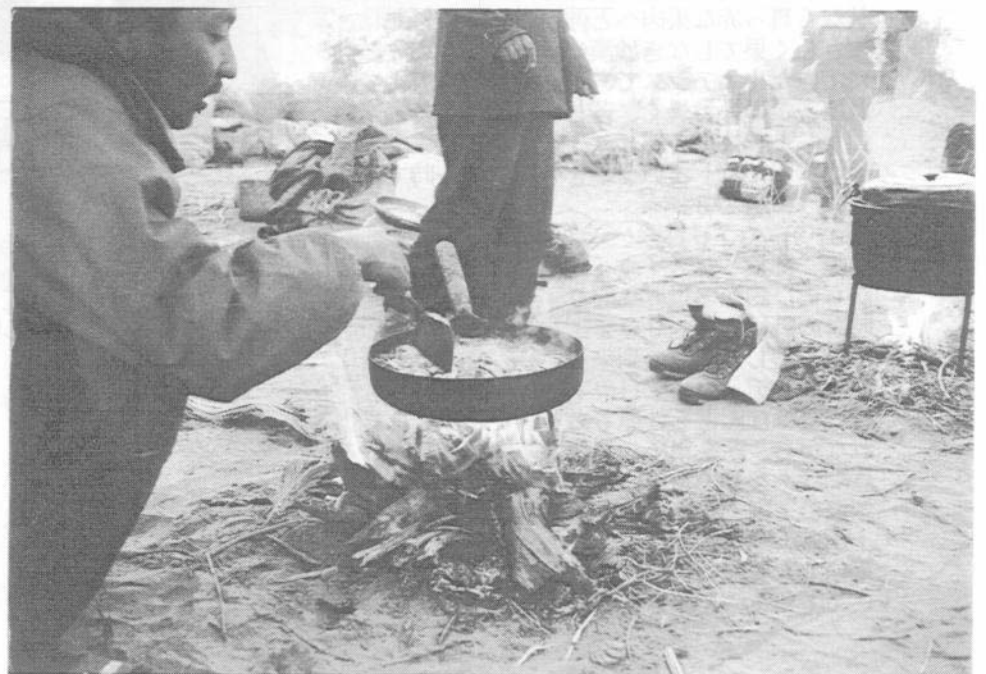
水々しいスイカを切る

ム圏でお馴染みのシシカバブー。これは、羊肉を一口サイズに切り串に刺し、大量の塩と香辛料を振りかけて炭火で焼いたもので文句なしに美味しい。これとナン（ウイグルの非発酵パン）さえあれば他に何もいらぬほどである。イスラム料理の横綱がそれであれば、中華料理の横綱は、「トマトと卵の炒め物」だ。作り方はいたって簡単で、まず①十分に熱したフライパンにたっぷり油をひき②塩とビール少々で味付けしたとき卵を半熟になるくらいまで焼き③その上に一口サイズに切ったトマトをドサッとのせて混ぜれば出来上がり。この料理はビールを入れるのがミソで、これを入れるとこくがフワリとしコクがでて旨味が増す。非常に簡単にできるのでぜひお試しあれ。その他にもヘミといって、羊肉と玉葱を細かく刻んだものを小麦粉につつんでかまどで焼く（砂漠にはかまどが無いので、灰の中に突っ込んで砂をかけて焼く）いわば羊肉のハンバーガーが、とても美味しい。

腹一杯食った頃には、辺りはすっかり暗くなっており、満天の星が輝いている。そんな美しい星空の下で、皆思い思いの場所に向かう。日記をつけにテントに戻る者もいれば、杯を交わしながら夜遅くまで火を囲んで語るものもいる。また、何をしに行くのか、漆黒の闇へと消えゆく者もいる。一日の中で唯一のプライベートタイムである。そしてこの安らぎの一時が終われば、再び灼熱地獄が我々を迎えるのである。



捌いたばかりの羊のブツ切りをゆでる。今夜はご馳走だ！



焚き火で調理